

早稲田大学における教育支援の取り組み

—Faculty Café を中心に—

蔣妍 森田裕介

早稲田大学 大学総合研究センター

背景と目的

早稲田大学は創立 150 周年に向けた中長期計画の中で、対話型、問題発見・解決型教育の移行を目指している。この移行を支援する取組の一つとして、Faculty Café があげられる。Faculty Café は「教えること」について話し合う場として、早稲田大学大学総合研究センター（以下、大総研）を中心に企画運営されている。本発表は 2018 年度実施したものを基軸に報告する。また、参加者のアンケート結果に基づき、そこから見えてきた教育支援の現状と課題について考察する。

2018 年度 Faculty Café の実施概要

2018 年度 5 月から月一回頻度で Faculty Café を開催した。本稿を提出するまで 5 月、6 月、7 月、9 月、10 月、11 月、12 月、全 7 回を開催した。広報は開催月の 1 ヶ月前に学内メール、お知らせ、大総研 HP などの形で行っている。最初は学内限定のイベントだったが、9 月、11 月と 12 月は学外の参加者も受け入れた。開催にあたり、著者の一人がコーディネーターとなり、担当講師との企画相談、職員との間での広報準備及び当日の運営にあたった。テーマは、反転授業、アクティブラーニング、留学生支援、学生エンゲージメントなどであった。

対象と方法

開催した効果と改善点を探るために、毎回参加者にアンケートを実施した。本発表では学内に限定した 4 回分のアンケート結果に基づき分析を行う。表 1 に、分析対象とした Faculty Café の開催内容 4 回分の題目と使用言語を示す。

表1 Faculty Caféの開催内容

	題目	言語
5月	反転授業	日本語
6月	アクティブラーニングと高大接続	日本語
7月	Student Engagement	英語
10月	アクティブラーニング	日本語

結果と考察

表 2 に参加者の内訳を示す。参加は任意である。表から見て取れるように、非常勤講師が積極的に参加している。また自由記述では、もっと頻繁に開催してほしいとのコメントも見られた。

表2 参加者の内訳

	5月	6月	7月	10月	合計
教授	6	9	3	1	19
准教授	2	7	5	5	19
講師	6	2	3	3	14
助教	0	2	4	2	8
非常勤講師	6	11	5	6	28
その他	2	3	3	7	15
合計	22	34	23	24	103

表 3 に、参加動機について集計した結果を示す。アンケートでは、参加するきっかけ（複数選択可）を聞いていた。回によって理由は様々だが、概ね「教え方」や「テーマ」に関心があるといえる。この結果に基づき、主催側は教え方に焦点を当てた企画を心掛けるようになった。

表3 参加動機

	FD に興味・関心がある	教え方に興味・関心がある	テーマに興味・関心がある	講演者に興味・関心がある	自分の授業をよりよくしたい
5月(N=22)	7	15	13	NON	18
6月(N=34)	14	14	17	18	1
7月(N=23)	13	16	13	4	15
10月(N=20)	2	11	11	3	12

また、Faculty Café の内容について、5 段階で評価をさせた。4 以上は肯定的な意見と捉え、表 4 で肯定的な回答件数を示す。すると、概ね肯定的な回答を得たといえる。

表4 Faculty Caféに関する評価

	内容は今後に役立つ	内容はわかりやすかった	内容に満足した
5月(N=21)	20	21	20
6月(N=30)	25	29	24
7月(N=23)	21	22	21
10月(N=20)	18	15	17

今後の課題としては、参加者が学んだことを自身の授業に生かしているかどうかを精査する必要がある。